

MACF 礼拝説教要旨

2022 年4月3日

「洗足を模範として」

ヨハネによる福音書 13 章

13:1 さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。

13:2 夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。

13:3 イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、

13:4 食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

13:5 それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。

13:6 シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。

13:7 イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。

13:8 ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。

13:9 そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」

13:10 イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いので、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」

13:11 イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、

「皆が清いわけではない」と言われたのである。

13:12 さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。」

13:13 あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。

13:14 ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。

13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。

13:16 はっきり言っておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。

13:17 このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。

\*\*\*\*\*

1) 主が足を洗う

当時の社会では「足を洗う」という作業は頻繁に行われていました。

当時、人々は素足にサンダルを履いていましたから、足はいつもほこりで汚れていました。しかも、人の足を洗うのは、奴隷の仕事でした。この作業のためにはユダヤ人奴隷ではなく外国からの脱走奴隷、いわば社会の一番底辺に属していると見られていた人たちの仕事だったので。

でもイエス・キリストは、弟子たちの足を洗い始めたのです。

「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」とありますが、この姿勢こそキリストの愛するという意識だったので。

「しもべの姿で仕える」ということ。

## 2) 示された愛

でも、さすがにペトロは驚いて、こう質問します。

13:6 シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」

奴隷の人の仕事を自分たちのポストがしているのですから、この質問は当然かもしれません。イエス様はそれを承知して

13:7 イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。

実は、なぜイエス様が愛を表すのに足を洗うというようなことをしたのか弟子たちには理解できていませんでした。

そしてさらに会話が続きます。

13:8 ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。

13:9 そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」

この愛の行為を受け取るために必要な要素があるのです。それは「謙遜」な心。私には洗っていただかなければならない汚れた部分がありますと認める心。どうぞよろしく、と差し出す勇氣。

ペトロは「わたしの足など、決して洗わないでください」先生にそんなことをさせるわけにはいきません。それは奴隷の仕事であり、先生には関係ありませんと伝えるわけです。

ところがイエス様は

「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。」とあり、慌ててペトロはこう言います。

13:9 そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」

つまり、神の私たちに対する思いやり、愛、優しさは「まるで神が私たちの奴隷になったような態度で、奴隷がさせられている一番身分の低い仕事をよろこんで、私たちのためにしてください」という不思議な出来事なのです。

神が、いわば汗まみれになり、ホコリまみれになり、血まみれになって私たちの汚れを落とし、私たちの心も生活も清めてくださるという出来事なのです。

そこには、まもなくイエス様を裏切ろうとしているユダも足を洗われた弟子たちの中に含まれていました。イエス様は黙々と弟子たちの足を洗いました。

実は、イエス様はこの出来事の翌日、捕らえられて十字架にかけられます。

ですから、この出来事はイエス様の遺言のような意味を持っています。

## 3) 互いに

そして、足を洗い終わったあと、弟子たちにこう伝えます。

13:12 さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。

13:13 あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。

13:14 ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。

13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。

13:16 はっきり言うておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。

13:17 このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。

日本では仏教由来の言葉として「足を洗う」という表現があります。

「悪いことを改め、その道から身を引く」という意味です。決して悪い言葉ではないと思います。

でも、「イエス様が互いに足を洗い合いなさい」と言ったのは、互いに自分をその人に「仕える立場」の人間と考え、「責め合うのではなく」「赦し合いなさい」ということなのです。

その人の足を洗う事のできる心持ちで、その人と関わっていきなさい。

互いにそういう心を分かち合える関係を築いて行きなさいということなのです。

しかも、それを当然のこと、報いを求めずにそれをしなさいということです。奴隷には報いはありませんから……。

それがイエス・キリストの弟子たちに対する行動に関する遺言です。

人間の心の汚れは、赦されることによって、また愛されることによってしか、本当のところは取り除かれないからです。

私たちは他者に厳しく自分に甘い傾向があります。

あなたの足は臭い、あなたの口も臭い、そしてあなたはほこりにまみれていてこちらが汚れるけれど、仕方なく付き合ってあげているのだと、言っている人はその存在自体が案外「傲慢で横柄」なものであり、他者の足を洗う心の用意が

できていないかもしれません。

いいえ、むしろ、キリストに足を洗ってもらおうということの素晴らしさ、感動を味わっていないということなのかもしれません。

キリストは足を洗う、ばかりか、自らが血を流し、侮辱され、苦しみを味わい奴隷どころか犯罪人にまで仕立てられて、私たちの痛み、苦しみ、悲しみ、罪、とがめ、すべてを十字架の上で処理してくださいました。

別の言い方をすれば、私たちはキリストの十字架の血潮によって私たちの心も魂も存在全ても「洗い清められた」のです。

ですから、それを味わった私たちは、日々の生活を「奴隷のような誰かに足を洗ってもらおう」ことを望むのではなく「自ら他者の足を洗う」ことを受け止め、受け入れる心をもって生きるようになるのです。

もしかしたら、あなたの挨拶、あなたの笑顔だけでも「相手の足を洗った」のと同じくらいの意味深いものになる可能性があります。

相手の祝福を祈ること、これもまた、相手の足を洗うことと繋がります。

振り返ってみると、私は実に多くの人達に足を洗って頂いたなあと思います。

私のことを思い、考え、支援し、まるで足を洗うかのようにケアしてくださっている人たちに心から感謝します。お返しということではなく、わたしもまた、できる範囲内ですが、皆さんの足を洗うお手伝いをさせていただきたいと思っています。

\*\*\*\*\*

礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/ah2b0yELTxg>